

一般演題（口演）

2025年11月15日(土) 15:20～16:20 第6会場

[O26] 一般演題（口演） 26 手術手技・直腸脱

座長：石井 良幸(北里大学北里研究所病院), 中西 正芳(松下記念病院)

[O26-8] 直腸脱に対するLaparoscopic suture rectopexyの治療成績

井出 義人^{1,2}, 野中 亮児¹, 山川 拓真¹, 岡 啓史¹, 村上 剛平¹, 山中 千尋¹, 出村 公一¹, 森本 修邦¹, 西田 俊朗¹
(1.JCHO大阪病院外科, 2.国家公務員共済組合連合会大手前病院)

【背景】直腸脱は高齢者に多くみられ、QOLを著しく損なう疾患である。手術による治療が標準であるが、高齢者では低侵襲かつ安全な術式が求められる。当院では、脱出長5cm以上で全身麻酔が可能な症例に対し、メッシュを使用しないLaparoscopic suture rectopexy (LSR) を第一選択としている。本研究では、当院におけるLSRの治療成績を後方視的に検討した。【方法】2019年4月から2025年3月までに当院でLSRを施行した全例を対象とし、年齢、性別、術前全身状態、脱出長、手術時間、出血量、術後合併症、術後入院期間、再発率について検討した。【結果】対象は18例（男性1例、女性17例）で、年齢中央値は83歳（73–95歳）であった。PSは0/1/2が1/11/6例、全例に何らかの併存疾患を認めた。脱出長の中央値は5 cm（5.0–10.0 cm）であった。術式は全例LSRを施行し、手術時間の中央値は118分（93–160分）、出血量は全例少量であった。術中の合併症は認めず、術後1例で化膿性椎間板炎を発症した。術後入院期間の中央値は6日（1–73日）であった。観察期間の中央値は38.9か月（1.0–69.2か月）であり、全例で再発を認めなかった。【結論】直腸脱に対するLaparoscopic suture rectopexyは、高齢者にも安全に施行可能であり、再発率が低く、非常に有用な術式の一つであると考えられる。